
電車

Doronco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車

【Nコード】

N2113Y

【作者名】

D o r o n c o

【あらすじ】

電車でおきる、悲劇。

※グロテスクな部分もあり、読後感も爽やかではありません。

彼は左足に靴を履かない。靴下も履かない。

アスファルトが焼ける真夏にも、霜の降りる真冬にも、やはり彼は何も履かない。

とうに爪は磨り減り、踵はかさかさにひび割れている。

今では電車にも車にも普通に乗る。だがその左足にだけは、靴も靴下もどうしても履けない。

スーツの裾を長めにしており、傍目には分からない。それでも気付いて不審に思う人はいる。理由を問う人に彼は、いやあ、どこか狂っているんですねと人事みたく答える。

氣遣った娘が一生懸命彼に編んだ靴下は、まだ一度も履かれることなく筆筭に眠っている。そう、娘はあのころまだ九つだった。

忘れつつあるし、忘れたと思う。でも電車の中、扇風機が低く唸るのを聞くと、やはりあの日と思い出す。

九時二十五分、彼は自宅から最寄の三ツ境駅まで歩き、ちょうどホームに入ってきた急行列車に乗り込んだ。

車内は土曜日ということもあり、座っている人より立っている人のほうが少ないくらいだった。

ドア脇には野球部だろう、体格の良い学生が大きなスポーツバックを置いて立っていた。

八人掛けの座席には六人がゆったりと座っており、座れそうな隙間は無い。彼がつり革

に？まった時、ゆらりと電車が走り出した。

電車の中で目の向け所に困るのは、自分だけだろうか？ そうではないと彼は思う。これほど近くに居て、これほど互いが互いに無関心を決め込む場所是他に無い。

座席の六人のうち、四人は携帯電話を手にしており、残る二人は

瞑目している。

停車駅の間は狭く、次の希望が丘駅までは一分で着く。ラッシュ時は激しい出入りも、その日は恰幅の良い中年女性が乗り込んだだけだった。

「良かったら――」

呟くような声は、それでも響く。眠っているように見えたニット帽の若い男が席を立ち、女性に声を掛ける。

「まあ、ありがとう」

女性は笑顔で彼の右斜め前、空いた席に腰掛ける。

彼も笑顔を若者に向けたが、若者は平然としたものでそれには応えなかった。何気なく若者の視線を追い、そのまま見慣れた車窓の景色を眺める。

車輪の刻む二拍子を、電柱がほんの少し間延びしたりリズムで追いかける。決して合わさらない二つの微かな苛立ちを、連綿とうねる電線が繋ぐ。

二俣川駅を過ぎると、もう終点の横浜駅まで停まらない。列車は速度を上げ、より快いテンポで走り始める。

瞬間。

突き上げる鈍い衝撃。視界が反転し、彼には空の青が見えた。

腹が何かに叩きつけられる。必死でそれを掴む。誰かの悲鳴が聞こえた。

擦れるような金属音。何かの割れる音。足が扇風機に叩きつけられる。

叫び声。彼は必死で手に力を込めた。右手は吊り革。左手は――。

金属音が止む。彼は左手で網棚に掴まり、必死にぶら下がっていた。

眼下を視界の隅にみやると、紅の中に叫ぶ白い歯が浮き出てみえた。

「助けて！」

「あっちだ！」

皆が互いに違う方向へ足掻く。互いが互いを踏みつけ、押しのけ、引き摺り、光の差すほうを目指した。誰かが殴られた。

誰かの手が強い力で彼の左足を掴む。必死で網棚の縁を掴みなおし、振り払う。

幾ら力を込めて振っても離れない。見下ろす。

張り詰めた細い指に、薄桃のマニキュア。乱れた髪の毛の奥。その両眼。捨て去られた子のような、それでいて異常に強い光を放つ。彼女は歯を食いしばっていた。

革靴が下に落ちた。爪が靴下を通して肌に食い込んでいた。彼の指も限界に近付いていた。右足も使って必死でその手を振り払う。ずるり、と靴下ごと抜けた。

彼女は突き飛ばされる。だが見えなくなるまでの一瞬、視線はずっと彼を捉えて離さなかった。

素足の左足は網棚にすぐ届いた。彼は身を引き上げ奥の方に縮こまる。

ニット帽の男が見えた。

踏まないで踏まないで踏まないで。

足元のあの女性に彼はもう気付かない。血塗れのその顔を男は踏みつける。鼻が奇妙な方向に折れ曲がっているのが見える。ガラスの散乱した床。頬に擦られ嫌な音がする。

彼はどこか人事のように感じていた。座席の下には緊急時用のドアのレバーがある。

誰か気付けば良いのに。ぼんやり考える。

横では学生服の男が、拳でガラスを殴っていた。だが罅割れが僅かに広がるだけ。溝を紅が伝う。

救助が来たのは二十分後。

残っていたのは、踏みつけられた重傷者の呻き声。
そして網棚を握り締めたままの彼。

彼はそれから、左足に靴を履かない。靴下も履かない。

(後書き)

このような夢をみました。

作品としては、描写はもっとエグくてもよいのかもしれませんが、極限下での心理状態、その結果としての靴下。

その一点に重力の集まった小説になっているかどうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2113y/>

電車

2011年11月4日14時39分発行